

河村貞枝・今井けい編

『イギリス近現代女性史研究入門』(青木書店 2006年)

香川せつ子

イギリス女性史研究会 (Japanese Women's History Network) が誕生したのは、今から8年前の1999年5月であり、運良くも私は発足時よりのメンバーとなった。最初の会合の参加者は、ドイツやロシアの研究者も含めて20名あまりだったように記憶する。ガヴァネス研究、女性史研究の先達である河村貞枝氏 (主著『イギリス近代フェミニズムの女性像』明石書店 2001年)、女性労働運動史の今井けい氏 (主著『イギリス女性運動史』日本経済評論社 1992年)をはじめとして、それまで著作を通してお名前を知るのみであった方々との出会いに、とても感激した。

初回の報告は、エセックス大学でPh.D.を取得し帰国された酒井順子氏による「オーラル・ヒストリー」についてのものであり、新しい研究方法の有効性をめぐって活発な論議が展開され、教育史を研究する者として参考になった。そこではまた、今や女性の若手研究者が数多くイギリスで学位を得る時代になっている、日本の大学にこれらの研究者が活躍できる場をつくり出さねばならない、といったことにも話題が広がった。学問分野や世代の違いを越えて、女性史やジェンダー史に関心を抱く者が集まり、日本での研究の裾野を開拓していこうという思いが、メンバーに共有されていた。

以後、JWHNの例会は年に一回行われ、主に若手研究者による報告をめぐり、中堅・ベテランあいまじって論議するというパターンで今日まで続いている。その途上で、これまでの研究成果をひとまず形にし、学際的な研究発展への足がかりとしようという話が浮上し、本書の刊行へと至ったわけである。もちろん『入門』とあるように、この分野に関心をもつ学生、院生への研究上の道しるべとすることが大きなねらいであった。

まず、本書の構成を一瞥していただきたい。

- 第1章 フェミニズム論の形成 (2節構成、梅垣千尋、水田珠枝)
- 第2章 家族と教育 (4節構成、山口みどり、秋山麻実、塚本有紀、香川せつ子)
- 第3章 女性と政治 (3節構成、古賀秀男、山岸裕子、河村貞枝)
- 第4章 女性と労働 (4節構成 松浦京子、竹内敬子、大森真紀、今井けい)

- 第5章 慈善と社会福祉 (3節構成 金澤周作、高田実、出島有紀子)
第6章 大英帝国と女性 (3節構成 井野瀬久美恵、高橋彩、堀内真由美)
第7章 第二次世界大戦、そして現在——何が変化し、何が継続したのか (奥田伸子)
補論 女性史からジェンダー史へ (酒井順子)

以上、各章の章題と各節の著者名をあげたが、それぞれの学問領域においてジェンダーの視点から女性のさまざまな経験について考察した力作がそろっている。従来のイギリス近現代史の欠落部分を補完するのみでなく、新たな歴史像を描き出そうとする意気込みをもって(どこまで成功しているかについては批判があるかもしれないが)、執筆にあたった。しかも、21名からなる著者の年齢は、70歳代から30歳代まで広範に渡っている。ここで、すべての章を解説することは紙幅の都合上できないので、筆者の関係する第2章について簡単に紹介しておきたい。

第2章「家族と教育」では、ヴィクトリア期のミドルクラス女性が「家庭」を基盤とする教育を受けつつ、どのように自己形成し、活動の場を確保していったのか、「フェミニニティ」の多様性と葛藤とをみようとした。第1節「ヴィクトリア期の女性と家族観」(山口)では、男女の領域の違いを強調する思想とヴィクトリア期の家庭観、それらが女性の生活に与えた影響について、第2節「辺縁としてガヴァネス」(秋山)では、ミドルクラス女性の家庭教育を担うガヴァネスの辺縁性とその表象について、第3節「少女の社会化」(塚本)では、女子教育改革の洗礼を受けた少女たちの古さと新しさについて、第4節「女性の高等教育」(香川)では、家庭を離れた学寮という場で高等教育を受ける女性たちの経験について、それぞれに考察がなされている。4つの節を通して、当時の女性が、少女から女性へと成長していく過程で、一方では伝統的女性観の、他方ではフェミニズムなど新しい思潮の影響を受けながら、屈折した多様な道筋を経て、家庭から社会へと活動の場を拡張するプロセスの複雑な様相を浮き彫りにせんとした。

他の章もそれぞれに意欲作が揃っており、イギリスの教育の歴史を考究するための背景的な知識を得ようとするときにきわめて有益な書であると思う。また巻末にはかなり丁寧につくられた「文献案内」や「年表」が掲載されており、イギリス史を俯瞰するうえで役に立つ。

私自身にとって最もありがたかったのは、本書作成の過程で得られた学際的な研究交流である。JWHNを特徴づける世代や研究分野を越えた研究者の協働は、『研究入門』という一冊の図書づくりを通して、互いの論文へのクリティカルな批評も含めて、より確かで発展的なものとなったと実感する。願わくば、日英教育学会に集う気鋭の研究者

の方々が、本書を通して女性史、ジェンダー史の魅力に出会い、JWHNのネットワークに参加されることを。執筆者の一人として、そう考える次第である。